



宮司プレス 第二百十八号

彦島八幡宮 宮司ニユース
発行者 彦島八幡宮
宮司 柴田 宜夫
発行 令和六年 七月二十七日

◇宮司の柴田です。とうとう、やつとの思い

で辿りつきました。毎月一回にキヤッチアップ

です。なんと、百三十一号ぶり、堂々と

「月刊宮司プレス」と声高に宣することができ

ます。何と、十二年の時間を費やしたことに

なります。感慨も一入です。しかも、私の

誕生日にこの慶事を迎えることになるうとは、

なかなか、重畳（このうえもなく満足なこ

とです）であります。

◇私は、昭和三十七年七月二十七日に生を享け

ました。しかも、午後三時であったそうので、

過酷なお産であっただけに、母は産後、生死を

彷徨ったそうです。今は空しくなりましたが、

その母は、「人は神様のお力によって、生かされ

て生きている」ということを常々申しております

して、その母の言葉が、私の神職としての心の

縁でもあります。日本三大随筆のひとつで

ある「徒然草」を書かれたのは吉田兼好さんで

す。「四季は定まれる序あり 死期は序を

待たず」と、はじまる第百五十五段には、「死

は、前よりしも来らず、かねて後に迫れり」と

あります。さらに、こう続けています。「人

皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざ

るに、覺えずして来る。沖の干潟遙かなれど

も、磯より潮の満つるが如し」と。この第百五

十五段の意味は、人は誰でも、死のくることを
知っているが、そんなに急にやってくると思

つてもいないのです。しかしながら、死は予
期せぬ時、突如としてくるのです。それは、

沖の方まで干潟になって、遙か彼方まで広々と

している時に、潮が来るとは思いもよりません。

人の死は、磯の方から潮が満ちてくると同じ

ように、突然、あつという間にやってくるので

す。そのような覚悟をもって日々を過ごしてい

ます。長きにわたり人種差別撤廃の運動を

つづけられ、インド独立の父といわれたマハト

マガンジーさんは、「明日死ぬつもりで生きな

さい、永遠に生きるつもりで学びなさい」とさ

とされています。残された時間を大切に、

寸暇を惜しみつつ、それでいて、あせらず、じ

つくりと取り組む生き方を示唆されているよ

うに思います。
◇今日で、六十二歳ですが、「七掛け」をして、
氣持ちは、四十三、四歳のつもりで、「生かされ
て活き活き」と、今日しかないという氣持ちで
時間を大切に、しかも、どん欲に過してまい
ります。御自愛ください。

◇七月の祭典行事報告(予定も含む)

▼月次祭

◆本宮 *六月一日、十五日

◆貴布祢神社 *六月一日

▼七社祭 *七月九日

※六連島に点在する七つの社の合同の例祭を、六連島八幡宮拝殿にて斎行



▼竹の子島天満宮例祭 *七月十五日
▼海開き *七月十五日



▼田の首八幡宮夏越祭 *七月二十一日



▼六連島八幡宮夏越祭 *七月二十五日
▼彦島八幡宮夏越祭前夜祭 *七月二十九日
▼彦島八幡宮夏越祭御神幸祭 *七月三十日
▼海士郷恵比須神社夏越祭 *七月三十一日
▼花手水実施 *七月二十六日
◇七月宮司動静(予定も含む)

▼神社関係団体

◆早起会参拝 *七月一日

◆敬神婦人会役員会 *七月十一日

◆維蘇志会八月例会 *七月二十日

◆奉賛会奉仕作業 *七月二十六日

◆敬神婦人会奉仕作業 *七月二十八日

▼神社庁関係

◆山口県神社総代会役員会、教化委員会、神職養成講習会講師打合 *七月四日

◆山口県神社庁役員会、支部長事務局長会議、八幡宮会総会 *七月五日

◆教化部事業計画プレゼン出向

*長陽支部 ↓ 七月十六日

*防府支部 ↓ 七月二十二日

↓ 七月二十二日

◆下関市総代敬婦合同役員会*七月二十二日

◆自治会、学校関係、その他

◆玄洋校区挨拶運動 *七月十日

◆玄洋校区研修会 *七月十二日

◆迫町自治会役員会 *七月十七日

◆彦島まち協 *七月二十三日

◆学校統合協議会 *七月二十四日

▼講演活動

◆向井小四年一組出前授業 *七月二日

月二日

※「向井校区の歴史と文化」について



▼教誨活動 美祢社会復帰促進セン

夕

*七月二十九日 ↓ 集合教誨女子